

成果の説明書

(氏名) 岡田知之	(学部) 経済学部
<p>1 重要事項</p> <p>今年度は、比較優位説の拡張について考察した。比較優位説とは、生産性に違いがある国の間では、(たとえある国の生産性がすべての財に関して他の国よりも劣っていたとしても) それぞれの国が相対的に生産性の高い財の生産に特化し、その財を互いに輸出しあうことにより、全体として(貿易を行わない場合よりも) より豊かな状況を実現することができるという考え方である。</p> <p>通常、比較優位説を説明する際には、生産要素が1種類、生産される財が2種類し、生産性の異なる2国間でどのように生産が行われるかを考える。このケースでは、状況は比較的単純で、ある国は(その国において相対的に生産性の高い) 一方の財の生産に特化し、他の国は(その国において相対的に生産性の高い) 他方の財の生産に特化し、両国間で生産した財を輸出しあうかたちとなる。</p> <p>今年度は、このような比較優位説の考え方の拡張として、(生産要素は1種類で) 3カ国以上存在するケースや生産される財が3種類以上存在するケースを考察した。きちんとした分析はまだできていないが、結論の見通しを以下で述べてゆく。</p> <p>まず、生産要素が1種類、生産される財が2種類、そしてmカ国 (mは3以上) 存在するケースについては、次の2つのケースが考えられる。1つ目のケースとしてはm_1カ国がある財の生産に特化し、m_2カ国が他の財の生産に特化し、1カ国が両方の財を生産する。そして生産に特化した財を互いに輸出しあう。ただし$m_1 + m_2 + 1 = m$である。2つ目のケースとしては、1つ目のケースとしてはm_1カ国がある財の生産に特化し、m_2カ国が他の財の生産に特化する。そして生産に特化した財を互いに輸出しあう。ただし$m_1 + m_2 = m$である。m_1、m_2の大きさや貿易を行う際の財の交換比率(交易条件)は両財に対する需要の構造により定まる。</p> <p>次に、生産要素が1種類、生産される財がn種類 (nは3以上)、そして2カ国存在するケースについては、次の2つのケースが考えられる。1つ目のケースとしては、n_1種類の財をある国が生産し、n_2種類の財を他の国が生産する。そして、1種類の財を両国で生産する。ただし$n_1 + n_2 + 1 = n$である。2つ目のケースとしてはn_1種類の財をある国が生産し、n_2種類の財を他の国が生産する。ただし$n_1 + n_2 = n$である。n_1、n_2の大きさや貿易を行う際の交換比率(交易条件)は、各財に対する需要構造により定まる。</p> <p>最後に、生産要素が1種類、生産される財がn種類 (nは3以上)、そしてmカ国 (mは3以上) 存在するケースであるが、このケースについては、まだ十分な見通しを立てることができない。生産される財の種類と存在する国の数が同数の場合については、過去の文献で、効率的な生産(全世界でみたとき、ある種類の財の生産量を増加させると、必ず他の種類の財の生産量が減少する状況)を実現するための条件が示されているようである。ただし、この条件は、それぞれの国が異なる1種類の財を生産する際に適用される条件である。おそらく、それぞれの国が異なる1種類の財を生産する状況以外にも、効率的な生産が達成される状況があると考えられるし、また、生産される財の種類と存在する国の数が同数でない場合についても、($n > m$、$n < m$のどちらの場合も) 効率的な生産が達成される状況が存在するであろう。効率的な生産が達成される状況とは、こういった状況なのかについて、もう少し検討してゆきたいと考えている。</p>	

2 その他の事項

3 次年度以降の計画・抱負

今回の比較優位説の拡張に関する考察は、ある種の思いつきで始めたところがあり、過去の文献をまだあまり調べていない。次年度は、もう少し過去の文献を調べつつ、考察を進めてゆきたい。